

## ニーズ分析の副次的効果

——教員と学習者のコミュニケーションの観点から<sup>1)</sup>——

岩 井 千 春

### Abstract

Various needs researches have been conducted in pursuit of learner-centeredness. Most of them have been on varieties of needs, needs analysis methods, needs in particular fields, and application to English language teaching including ESP. However, there has been little research into how learners feel about needs analyses conducted by teachers. The purpose of this paper is to discuss the effects of applying needs assessment to course design from a learner's perspective. The participants were 229 sophomore students at a university. Quantitative questionnaire data revealed that many of them welcomed the needs analysis. Qualitative data suggested that the needs analysis had valuable by-products, in that the questionnaire acted as a means of communication between a teacher and learners, and that appreciation of the efforts made by the teacher to conduct needs analysis for course design helped to develop human relationships. Although needs analysis can be a burden for both teachers and learners, improvement in methods could make such analysis easier to use and could also render English teaching more effective.

Key Words: needs analysis, ESP, teacher-learner communication

### 1. は じ め に

英語教育のコースデザインの基礎として重要な手順であるニーズ分析は多岐にわたる研究成果がある。その多くは、ニーズの様々な特徴に焦点をあてたニーズの種類やニーズ分析の方法論、そして、特に ESP (English for Specific Purposes=専門分野別の英語教育) で活発に研究されている特定の分野のニーズの実態と教育への応用などの研究である。更に、近年は、大学教育における F D (ファカルティデベロップメント)<sup>2)</sup> への意識の高揚から、学習者のニーズに基づいた教育が益々注目を集めつつある。

1) 本論文は、2004年度大学英語教育学会 (JACET) 関西支部春季大会 (2004年6月5日・流通科学大学) における口頭発表「ニーズ分析の副次的効果—教師と学習者のコミュニケーションの観点から—」の内容に加筆、修正したものである。

2) 個々の教員の授業内容・方法を不断に改善するため、全学あるいは学部・学科全体で、それぞれの大学の教育理念・教育目標や教育内容・方法について組織的な研究・研修を実施するなどの大学の取組。具体的には、教員相互の授業参観を行った上で授業内容・方法について討論を行い検討を深める、授業の運営方法について新任教員に対する研修会を開催する、授業内容・方法についての恒常的な検討組織を全学的に設けるなどの種々の取組が含まれる (文部科学省ホームページ [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/04052801/002.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/002.htm))。

実際のニーズ分析では、学習者は情報提供者として重要な役割を果たすことも多いが、教員がニーズ分析を行い教育に生かしたことが学習者にどのように感じられているのかについての研究は希少である。そこで、本研究の目的は、教員が授業内容の決定や改善の為にを行ったニーズ分析について、それを経験した学習者がどのように感じているのかをアンケート調査によって明らかにし、ニーズ分析が授業内容に果たした役割はもとより、学習者にとってどのような意義があったのかについての副次的効果を考察することである。また更に、ニーズ分析の問題点についても考察し、学習者に対するニーズ分析への示唆を導き出したい。

## 2. ニーズ分析の研究

これまでニーズ分析の研究は、本稿で扱うような特定の学習者に関するニーズ分析とその教育への応用を基にした実践研究の他に、様々なニーズの諸相に焦点を置いたニーズの種類に関する研究 (Brindley, 1989; Holliday & Cooke, 1983; Hutchinson & Waters, 1987; Munby, 1978), そして次節で概観するニーズ分析の方法論とそれを如何にコースデザインに生かすかについての研究がある。

### 2.1 ニーズ分析の方法論と授業内容への反映

ニーズ分析の際には、学習者を取り巻く様々な立場の人々から情報を集めることが重要であり (Bosher & Smalkoski, 2002; Jasso-Aguilar, 1999; Trimby, 1979; West, 1994), これにより、より綿密なニーズ分析が可能となり、学習者のニーズをより正確に把握することができる。また、ニーズとは、学習者中心の教育に有効な全ての情報 (Porche, 1983) であり、そういった情報から構成するもの (Richterich & Chancerel, 1977) との論考もある。更に、ニーズ分析の際には、教育上重要であるという教員の判断の下にニーズを構築する必要があることが指摘されており (Lawson, 1975), 本研究でもこの主張に基づき、ニーズを授業内容に反映する際には教育上重要であるかどうかの判断が重要であるとする。

ニーズ分析を行う時期は、コース開始前、コース開始時、コース途中、そして、コース最後が考えられ (例えば, Dudley-Evans & St. John, 1998; 深山, 2000; West, 1994), ニーズ分析は “on-going process” (West, 1994, p. 5) という認識の下、コース開始後も教員は学習者のニーズの変化 (例えば, 学習者が目指す分野で必要とされる英語使用の変化や授業内容に関する学習者の意識の変化) に関心を持ち、柔軟にシラバスに反映する必要がある。Graves (2000) も、コース途中のニーズ分析は、特に学習者達がどのように学習しているかに関する重要な情報を提供すると述べる。一方で、コース途中、およびコース最後の授業に関するニーズ分析は一般に授業評価とも呼ばれるが (Dudley-Evans & St. John, 1998), Trimby (1979) は、ニーズ分析と授業評価は非常に関連が深く、授業評価は授業改善の為に課題を提供する為、結果として次のニーズ分析に繋がるという。即ち、授業評価で得られた情報がその後のニーズを構成する要素となる。従って、Trimby はニーズ分析の重要な一部分として授業評価を捉える見方について述べており、これらに基づき、本

研究では授業に対する評価は学習者のニーズに関する情報と捉え、包括的にニーズ分析と呼んでいる。

学習者の意見をコースデザインに生かす考え方の中には、学習者との交渉 (negotiation) により授業内容を決定していくシラバス (process syllabus) も提案されている (Breen & Littlejohn, 2000)。Process syllabus においては、教育と学習が可能な限り効果的になるように教育の内容についての意思決定 (例えば、言語学習の目的、学習内容や方法、学習の成果など) に教員だけでなく、学習者も積極的に参加する。また、このことにより、学習者は、自分の学習に対して責任を持つようになるという。

ニーズ分析は、学習者に関する情報を集め、それを解釈し、授業内容に反映していく為の方法であるが (Graves, 2000), process syllabus は、交渉によって学習者とのインターアクションをより強調した授業内容の決定方法である。一方で、ESP 教育では、学習者や教員だけでなく、学習者の将来の職業の内容やその英語使用からも情報を収集してニーズ分析し、授業に生かす必要がある為、process syllabus だけで ESP 教育を行うには不十分である。そこで、本研究では、process syllabus における学習者とのインターアクションの有効性を視野に入れながら、ESP 授業のコースデザインの為のニーズ分析の一環として、授業途中に学習者にアンケート調査を行い、コースの途中で学習者が認識するニーズの変化にも対応したいと考えた。

## 2.2 ニーズ分析研究の問題点と本研究の課題

前節までで述べたように、これまでニーズ分析やそれを授業に反映する為の様々な研究が行われてきた。しかしながら、教員が実施するニーズ分析に対しての学習者の意識に関する研究は今まで行われてこなかったと考える。一方で、特に学習者に対してのニーズ分析の意義や問題点を明らかにする為には、ニーズ分析に対しても学習者の意見を分析する必要があると考える。そこで、本研究では、ニーズ分析によって筆者がどのようにコースデザインや授業改善を行ったのかを記述すると同時に、ニーズ分析に対する学習者の意識を分析し、学習者の視点から見たニーズ分析の意義と問題点について考察したい。

## 3. 調 査

### 3.1 授業開始前のニーズ分析とシラバス作成

対象の授業は、筆者が担当したある大学の管理栄養士養成課程に在籍する2年次生 (229名) の授業「実践英語」であり、半期で12回 (2003年9月～12月) 実施されたものである。シラバス作成の基礎資料とする為、学習者の学科 (大学) での調査と将来の仕事である管理栄養士に関する情報を集めてニーズ分析を行った。

#### 1) 学科のニーズと学習者について

学習者が所属する学科の専門科目の教員等に行ったインタビューの結果から、学習者の英語能力は概ね基礎～中級程度であり、専門教育もあまり進んでいない年次であるという

(表1) 管理栄養士の仕事概要

|            |                                                 |
|------------|-------------------------------------------------|
| 仕 事 内 容    | 栄養指導, 栄養管理・献立作成, 研究, 商品開発など                     |
| 活躍する分野     | 病院・学校・福祉施設・企業の栄養職員, 研究機関など                      |
| 求められる資質や能力 | 食物・栄養に関する知識, 研究能力, コミュニケーション能力, 他人を思いやる心, 柔軟性など |

岡崎 (1995), DAI-X 出版編集部 (2002) より作成

情報を得た。また、この授業は、将来の仕事を意識した英語教育であり、管理栄養士が病院などの医療施設で勤務することを想定し、外国人への対応の為にオーラルコミュニケーション能力を身につけることを目的としてカリキュラムが組まれたとのことであった。

## 2) 管理栄養士の仕事について

### 管理栄養士に関する書籍からの情報収集

管理栄養士についての書籍 (岡崎, 1995; DAI-X 出版編集部, 2002) から、管理栄養士の仕事内容、活躍できる分野、求められる資質などについて情報を集めた (表1)。

### 元栄養士へのインタビュー

本調査では、管理栄養士の経験がある者が最も適切ではあるが、栄養士は管理栄養士と同じ職場で働くスタッフであり、ある程度の管理栄養士の仕事のイメージを知ることについては有益であった為、ある栄養士にその仕事についてインタビューした。インタビューした人物は、病院で約一年半、栄養士として勤務した経験があった。以下にインタビューへの回答の概略を示す。

「栄養士はほとんど調理法と味付けをすることが仕事である。どんな栄養素が何グラムとか計算して献立を考える。病院で、今日はカレーの献立にするとすると、子供には甘く作ったり、材料を小さく切ったり、病気によって材料を変えたりして、調理法と味付けで一人ひとりの患者さんに合わせて食事を作る。それから、出す食事を食べてもらうように、話をしたりもする。子供だったら褒めて食べさせたりするけど、大人の人は決まった食事習慣があるから、食べてもらうのが難しいらしい。」

このインタビューの結果から、栄養士は一人ひとりに合わせた調理や味付けを行うだけでなく、実際に「食べてもらう」ことも重要であり、患者などの対象者と話をするなど、その為の栄養指導的な努力も必要であることが分かった。また、管理栄養士は、栄養士としての仕事や栄養指導のほか、栄養士よりも職場のリーダーとして更に管理的な仕事もあると考えられる。

### 管理栄養士に接した経験

これは筆者の過去の経験であり、管理栄養士が、高コレステロールの症状を持つ患者に対し、食事の内容や調理法についての栄養指導をする場面に同席した経験である。その時対応した管理栄養士は、一日に適切なカロリーを示し、特にカロリーの高い脂肪やコレステロールの多い食品について、その適量を示した食べ物の模型を使って、分かりやすくなるよう工夫して説明していた。また、適切な食事制限が持続できるよう、食事の満足感を得る為に、カロリーの低い野菜などの食品を多く取るよう勧めていた。更に、全体的な印象として、患者に敬語を用いるなど丁寧な対応に努めていた。

### 3) 授業内容の決定

これらの情報によるニーズ分析の結果から授業のシラバスを考えた。学科へのニーズ分析の結果から、授業の基本的な教材は食物や栄養、健康問題等のテーマをあまり専門的でなく広く扱ったもので、英語の難易度もあまり高くないものをテキストとして使用することとした。また、管理栄養士の仕事内容を分析すると、管理栄養士は患者など対象者一人ひとりに合わせた食事の献立を考える仕事であり、医療機関に勤務する場合は医療チームの中で連携して仕事をすると考えられる。また、施設で提供した食事を結果的に食べてもらうことや、栄養指導によりさまざまな患者に栄養の知識を理解させ、適切な栄養を摂取させる必要がある為、効果的な情報伝達能力、指導力、柔軟に問題に対応できる能力が重要であると考えた。そこで、将来の職業を意識した様々な副教材を使用し、総合的なコミュニケーション能力を養成する授業内容もシラバスに加えた。

### 3.2 学習者へのニーズ分析の概要

ニーズ分析は、インタビューや参与観察などの質的研究と、アンケートの量的研究、更に、質的研究と量的研究を組み合わせる手法に大別される。アンケート調査は比較的短時間に低いコストで多くの情報を得られるという利点がある為（辻・有馬, 1987）、ニーズ分析の手法として一般的に最もよく用いられるのはアンケート調査であり（West, 1994）、本研究の学習者へのニーズ分析においても、アンケート調査を採用している。

学習者のニーズを柔軟に授業内容に反映する為、コース途中に計4回のアンケート調査を実施している。アンケートは、学習者の負担や授業時間への影響を考え、毎回10分程度で回答できる数の質問に限定し、授業の区切りの良いところで、授業途中に実施した。（アンケート調査の概略は表2を参照。）アンケートを実施する際には、授業内容を考える為に学習者のニーズを把握することが必要であるとの筆者の考えを説明し、調査を実施することについて学習者から理解が得られるよう努力した。1回目のアンケートは最初の授業で実施し、現在の英語能力、授業に望むこと、管理栄養士の英語使用に関する理解など、学習者に関する基本的な情報を得る為に実施した。2回目のアンケート調査は4回目の授業で実施し、それまでの授業の感想と、その後実施する計画であった副教材の導入についての希望の確認を行った。3回目のアンケート調査は、副教材を使用中であった7回目の

(表2) アンケート調査概要

| アンケート調査 | 実施時期           | 主な調査内容                             |
|---------|----------------|------------------------------------|
| 1回目     | 最初の授業          | 現在の英語能力、授業に望むこと、管理栄養士の英語使用に関する理解など |
| 2回目     | 4回目の授業         | 授業の感想、新しい教材を導入する前の知識や希望の確認         |
| 3回目     | 7回目の授業         | 副教材の使用に関する意見                       |
| 4回目     | 12回目の授業（授業最終日） | 授業の感想、ニーズ分析の感想                     |

授業で実施し、副教材についての意見を聞いた。4回目のアンケート調査は最後の授業で実施し、授業の全体的な感想とニーズ分析についての感想を調査した。4回目のアンケート調査を除き、それぞれのアンケートの実施後は、必ず次の授業時に集計結果を報告すると同時に、個々の自由意見や質問についても回答すべきと考えたものは回答した。そして、授業の内容に反映すべきと筆者が判断した内容については反映し、反映できないと判断した内容については学習者に説明して理解を求めた。

### 3.3 授業への反映

以下にニーズ分析の結果を授業に反映した例や、反映しなかった場合の対処例を述べる。

1) 1回目のアンケートで、洋楽を利用して英語を学ぶことについての意見を聞いたところ、希望が強かった為（「とても勉強したい」から「全く勉強したくない」までの5段階評価で、「とても勉強したい」49.8%、「少し勉強したい」30.8%、合計80.6%）、毎回授業の最後の10分程度、穴埋め問題を作ってリスニングをしたり、実際に歌うことで楽しみながら英語の発音の練習をすることを取り入れた。そして、2回目のアンケートで、授業に洋楽を取り入れていることについての感想を質問すると、「もっとやりたい」から「もっと減らしてほしい」までの5段階評価で中間値の「今のままで良い」（64.2%）という答えが一番多く、更に、「もっとやりたい」と「もう少しやりたい」が合計28.0%に上った。実際に、学習者の中には、英語で歌を歌う楽しさを知り、授業以外でも授業で習った歌を歌っていると話す者もいた。しかしながら、筆者は、洋楽での学習は、英語学習を楽しくする為の補助的な授業内容と捉え、テキストなど他の教材で学習することを主要な授業内容とすべきと考えていたので、その旨を学習者達に説明し、洋楽を使つての英語学習は現状の量のままとすることに理解を促した。

2) 授業の進捗については、「とても速い」から「とても遅い」まで5段階評価の内、中間値の「今のままで良い」（65.8%）との意見が一番多かったが、「少し遅い」（22.4%）、又は「とても遅い」（3.7%）が、「とても速い」（0.5%）、又は「少し速い」（7.8%）より多くなっていた。一方で、「予習をしていない学生があたると進捗が遅くなる」との意見

がアンケートに書かれていたので、それを次の授業で伝えると共に、また筆者の意見として、英語学習における予習の重要性についての説明も加えると、予習をしてくる学習者が増えた。ある学習者からも、その次のアンケートで、「他の学生からの『予習をしていない学生があたると授業が遅くなる』」という意見を先生から聞いて、予習をするようになった」とコメントがあった。これにより、結果的に、英語能力の低い学習者にもあまり負担がかからない程度に進度が速くなり、進度が遅いと感じていた学習者にも「改善感」が感じられたと考えられる。

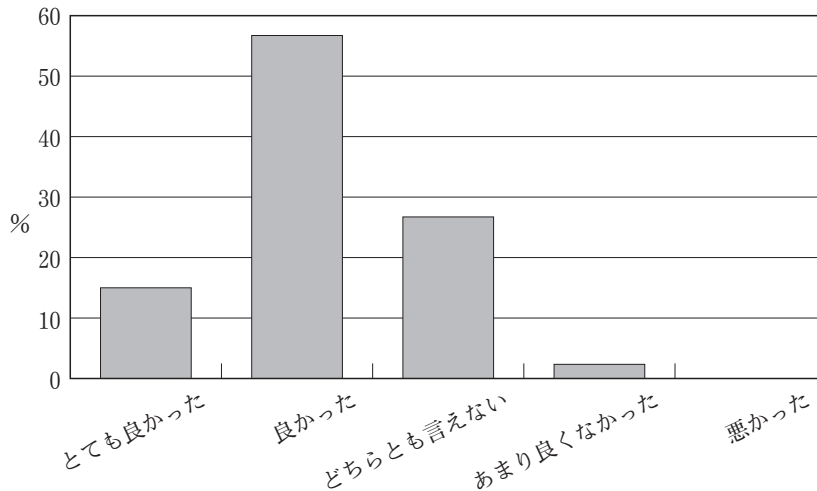
3) 2種類の副教材を授業に使用する際、導入する以前に、学習者に勉強したいかどうか興味の程度を聞いたところ、「とても勉強したい」から「全く勉強したくない」まで5段階評価の内、両教材共に約70%の学習者が、「とても勉強したい」又は「少し勉強したい」と答え、概ね興味を示したと考えたので、新しい教材の導入を決定した。また、使用した教材の使用期間（量）についても、筆者の用意した選択肢の中で学習者の意向に沿うように決定した。

### 3.4 調査結果

本研究のデータは、4回目のアンケートの中の、ニーズ分析に対する感想の質問で調査したものである。「授業に関するアンケートを行ってきましたが、どのように感じましたか？」という質問に対し、回答には、「とても良かった」から「悪かった」まで5択の選択肢を設定し、その下にその選択肢を選んだ理由を書く欄を設けた。結果は、回答者（有効回答数）209名のうち、「良かった」と答えた学習者が一番多く、56.4%（118名）、次に「どちらとも言えない」と答えた学習者が26.8%（56名）、次に「とても良かった」が14.4%（30名）、「あまり良くなかった」は2.4%（5名）であり、「悪かった」と答えた学習者は1名もいなかった（図1）。これらの回答数から判断すると、教員が行ったアンケートによるニーズ分析は概ね歓迎されていたと考えても良いであろう。

次に、上記の回答結果を選んだ理由の項目について述べる。ここでは、学習者の自由回答である質的データをその内容によってカテゴリーにコード化し、その頻度の多いもの（10名以上の回答数があるもの）4つを数量的に集計している。1つの回答に2つ以上のカテゴリーの内容がある場合は、その該当するカテゴリー全てに含めた為、複数回答の扱いになる。回答の多い順にまとめると、①授業に反映される有益性「意見が授業に反映された、要望を聞いてくれる」（47.4%，99名）、②アンケートの問題点「面倒、時間をとる、回数が多い」（20.1%，42名）、③コミュニケーション上の有益性「教員と学習者のコミュニケーション、双方向的、分かり合える」（11.5%，24名）、④教員への評価・人間関係「教員の熱意が伝わる、学習者の意見を聞こうとする姿勢が嬉しい」（5.7%，12名）であった。以下に各カテゴリーについて、具体例を挙げる。（自由回答例の後の数字は「アンケート調査の感想」の質問における選択肢の回答番号である。）

(図1) アンケート調査の感想 (n=209)



- ① 授業に反映される有益性「意見が授業に反映された、要望を聞いてくれる」(47.4%, 99名)

「自分達の意見がすぐに反映される授業というのはなかなかないのでとても好感がもてました。」(2)

「他の先生はアンケートをとっても決して意見を反映してくれることはなかったけど、先生は丁寧に毎回私達にあわせてくれたのがうれしかった(ハートの絵)。」(1)

「押し付けられる授業ではなく先生と生徒で作る授業で良かった。」(2)

「授業に反映されていて良かったと思います。」(2)

- ② アンケートの問題点「面倒、時間をとる、回数が多い」(20.1%, 42名)

「理由を書くのが難しかった。」(3)

「少しアンケートを取る回数が多い……と感じました。」(3)

「授業がよくなるのはいいことだけど、少し面倒臭い。」(3)

「何を書けばよいか分からない時があったから。」(3)

- ③ コミュニケーション上の有益性「教員と学習者のコミュニケーション、双方向的、分かり合える」(11.5%, 24名)

「アンケートの結果を報告してくれたので良かった。」(2)

「改善してほしいことなどを先生に直接は言いにくいから。」(2)

「先生とのコミュニケーションが取れてよかった。」(2)

「私達の意見にすぐ答えをくれたから。」(2)

- ④ 教員への評価・人間関係「教員の熱意が伝わる、学習者の意見を聞こうとする姿勢が嬉しい」(5.7%, 12名)

「一生懸命してくれているのが伝わるから。」(2)

「私たちの意見を取り入れてくれて、授業をより良いものにしようとしてくれる姿勢が嬉しかったので。」(2)

「先生は熱心だと思った。」(1)

「今までは受身の授業で生徒の声を聞こうとしない先生が多かったので、アンケートによって良い授業にしようとしてくれる先生がとても嬉しかった。」(2)

また、アンケート調査によるニーズ分析についてではないが、3.1で述べたように、筆者が授業開始前に行った、管理栄養士の仕事内容などについて調べたことに対して、学習者からの意見が以下のようにあった。

「先生が管理栄養士のことを調べてくれていて、うれしかったです。」

#### 4. 考 察

以上の調査結果から、ニーズ分析の果たした役割について、以下のことが考えられる。

##### 1) アンケートの回答を授業に反映する重要性

多くの学習者が「教員が学習者の意見を取り入れてくれた」とアンケート調査の結果を授業に反映したことを評価していた。通常、大学が授業評価として実施しているアンケートは授業の終盤になってから実施される為、その時点で記入している学習者の授業に反映されることは難しいが、本研究で行ったコース途中のアンケートは自分達の為に実施されていることが理解でき歓迎されたと考えられる。また、実際に、筆者は授業の開始以前より、授業内容については学習者の意見を加味してシラバスを決定することを計画しており、公表した授業シラバスにも、「講義内容については、学生の皆さんのニーズや英語能力に対応し、柔軟にシラバスに反映したい」という文言を加えている。従って、学習者に意見を聞き、授業内容に反映すべきと考えたものは反映した態度が、学習者に評価されたと考えられる。

また、このように自分の意見が授業内容に反映されたことを評価する意見は、学習者が自分たちで授業の内容を決定したという、自己決定感<sup>3)</sup>を学習者に与えた為と考えられる。更に、自己決定感<sup>3)</sup>は、学習の内発的動機<sup>4)</sup>を高めることも指摘されている (Deci, 1980;

---

3) 自己決定とは自分の意志を活用する過程であり、自分の限界を受け入れ、自分に働いている力を認識しながら選択能力を活用し、様々な支持を得ながら、自分の欲求を満足させることと定義されている (Deci, 1980)。

4) 「当該の行動以外に何ら外的報酬がないとき、その行動は内発的に動機づけられている」という (石崎, 1995, p. 40)。

Swann & Pittman, 1977; Zuckerman, et al., 1978)。そして、学習においては、学習自体に興味や満足感を得ている内発的動機づけが重要であると主張されてきた（新井, 1995; 市川, 2001; 桜井, 1997; 辰野, 1989)。本研究における英語学習に対しても、自己決定感が学習者を内発的に動機づけることが考えられ、学習の質を向上させた可能性がある。従って、本研究のように、アンケート調査によって学習者の意見を授業内容に反映させることは、内発的動機づけを高める手法としても意義があるのではないだろうか。

しかしながら、本稿 2.1 で述べたように、学習者の意見の中で何を授業に取り入れるのかに関しては、教員として教育的な観点から慎重な対応をしなければならない。

## 2) 双方向的コミュニケーションの確立

日本人の学習者にとって、授業に関して教員に自由に希望を述べることは、あまり多くは行われて来なかったことではないだろうか。しかし、学生は、教員に対して、質的に高い相互のコミュニケーションを強く求めているということが指摘されている（稲木, 1984)。このアンケート調査は、学習者自身がアンケートに回答したように、「教員に希望や意見を言える機会」でもあった。また同時に、アンケートの結果を報告する際には、教員の意図を学習者に伝えて理解を仰ぐことができた。このように、アンケートをツールとして、学習者と教員の双方向的コミュニケーションが生まれていたことになる。稲木（1984）は、教員が大勢の学生を担当する場合のコミュニケーションの困難さを問題として挙げているが、このような学習者のニーズ分析を目的としたアンケート調査は、大勢の学習者でも、互い意思疎通に有効ではないだろうか。

また、アンケートに書かれた学習者の自由意見の内容を教員が授業で公表することにより、学習者も他の者の考えを知る機会となり、学習者同士の意思疎通に貢献していた可能性も考えられる。本稿 3.3 節の 2) で述べたように、他の学習者の意見を聞いてから、自発的に予習した学習者の姿は、このコミュニケーションが学習意欲につながった事例である。

## 3) 学習者と教員の人間関係の構築にむけて

上記のように、アンケート調査において学習者が自分の情報や考えを教員に伝えることは一種のコミュニケーションと考えられるが、それは、コミュニケーション論の「自己開示」、即ち、「特定の他者に対して、自己に関する本当の情報を言語的に伝達する行動」（深田, 1998, p. 82）であると考えられる。また、自己開示は、伝達する情報が相手にとって新しい知識である必要があるという。これらの定義に照らし合わせると、教育現場のアンケートで学習者が意見や感想を述べることは、学習者による自己開示と考えられる。

また、一方で、教員がアンケートに書かれた学習者からの質問や希望などへの返事として、教員の考えや授業方針について述べる場合、これは、自己開示の受け手による「自己開示の返報性」、即ち、「自己開示の受け手が、同じ程度の深さ（intimacy）あるいは量の自己開示を開示者に返す現象」（小口, 1989, p. 163）と考えることができる。

自己開示の機能については、「適切な自己開示は、自己開示のもつ本来の機能が作用し、開示者自身、開示相手および両者の関係性に対して好ましい影響をもたらす」(深田, 1998, p. 89)と考えられている。そして、「返報性を基礎にして、より広く深い自己開示が行われるようになり、親密化の過程が進行する」(小口, 1989, p. 164)といった効果があるといわれる。即ち、アンケートを媒介としたコミュニケーションが生まれることにより、教員と学習者の人間関係が構築される可能性がある。

本研究の調査結果にも、学習者が教員に対して「熱心である」「一生懸命してくれている」などと教員を評価する回答があったが、これは、学習者が自分の意見や感想をアンケートの中で自己開示し、教員が学習者の意見に対して、教員の意見を述べたり、また、授業へ反映する手順の中で考えを述べるなど、自己開示の返報を行ったことにより、学習者と教員のより良い人間関係の構築に貢献していた可能性が考えられる。この授業の実施期間中には、栄養学に関する内容について学習者から情報を得る<sup>5)</sup>ことができたが、学習者との良好な人間関係が築けていたからこそ可能であったと考える。

#### 4) 回数の問題と学習者の負担感

学習者の中には、「回数が多い」とアンケート調査に不満を述べる者(20.1%)も多かった。これは、前述の1)～3)の考察と矛盾しているようにも見える。しかし、この不満を述べる者より多くの学習者(前述1)～3)の合計で約64%)が、アンケートの利点を述べている点に鑑みると、学習者全体として、より多くの学習者がアンケートの利点を認識しているものの、中にはその方法論に問題点があることを認識している学習者がいることを示していると考えられる。筆者の実施したアンケートは4回であったが、大学主催のアンケート調査を加えると学習者は5回のアンケートを経験したことになり、回数が多いと感じるに至った可能性が考えられる。更に、一部の学習者が「理由を書くのが難しかった」と述べたように、学習者自身の表現力や考察力の問題から、理由を記述式で書く際にアンケートに答える負担感が高まった可能性も考えられる。

#### 5. お わ り に

本研究では、ニーズ分析の研究を概観した上で、ある特定の授業の為に行なったニーズ分析を記述し、ニーズ分析に対する学習者の意見を分析することにより、学習者にとってニーズ分析とそれを授業に反映することにどのような意義があるのかを明らかにしてきた。そして、このようなコースデザインを目的としたニーズ分析は学習者が授業に対する意見を言える重要な機会であり、教員と学習者のコミュニケーションのツールとしての役割を果たし、それが学習者と教員との良好な人間関係を構築するという副次的効果があるということを考察してきた。学習者との人間関係構築の為には、アンケート以外にも個別の対

---

5) ESP教育では、特に授業内容が専門的になると、専門知識については学習者に尋ね、コミュニケーションの実践については教員がアドバイスを与えるという授業形態をとる場合がある(Dudley-Evans & St. John, 1988)。

話など他にも方法は考えられるが、全ての学習者と対話することは、時間的な制約もあって不可能に近い場合もある為、アンケートをコミュニケーションツールとして活用することは現実的に有効である。また、アンケートに書かれた学習者の意見を、教員がその必要性を判断の上、授業に反映させることで、自己決定感を与え、英語学習の内発的動機づけを高めて、その結果、学習効果を高める可能性も期待できる。ニーズ分析はESPのコースデザインの際に必要なと言われていたが、このような副次的効果を議論、検証できたことは、ESPのニーズ分析に更なる意義を与えることになるのではないだろうか。

今後の課題は、アンケート調査における学習者の負担感を如何に軽減するかという問題であろう。教員がアンケートの回数を考慮することはもちろんであるが、近年、より一般的に行われるようになった、大学主催の授業評価アンケートを教員のニーズ分析に組み入れることは一つの解決策となるであろう。例えば、大学の授業評価が、その実施時期や内容について各教員の判断に委ねられる部分が多ければ多いほど、教員の行うニーズ分析の一部を担うことも可能である。また、学習者の表現力を補う為に選択式の質問を多くし、比較的答えやすい質問内容にするなどアンケートデザインを工夫することも重要であると考える。

#### 参考文献

- 新井邦二郎. (編著) (1995). 『教室の動機づけの理論と実践』 金子書房.
- Bosher, S. & Smalkoski, K. (2002). From needs analysis to curriculum development: Designing a course in health-care communication for immigrant students in the USA. *English for Specific Purposes*, 21, 59-79.
- Breen, M. P. & Littlejohn, A. (eds.) (2000). *Classroom decision-making: Negotiation and process syllabuses in practice*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brindley, G. P. (1989). The role of needs analysis in adult ESL programme design. In R. K. Johnson (Ed.), *The second language curriculum* (pp. 61-78). Cambridge: Cambridge University Press.
- DAI-X 出版編集部. (編) (2002). 『なりたい!! 栄養士・管理栄養士』 DAI-X 出版.
- Deci, E. L. (1980). *The psychology of self-determination*. Lexington: Lexington Books.
- Dudley-Evans, T. & St John, M. J. (1998). *Developments in English for specific purposes: A multi-disciplinary approach*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 深田博己. (1998). 『インターパーソナル・コミュニケーション—対人コミュニケーションの心理学—』 北大路書房.
- Graves, K. (2000). *Designing language courses: A guide for teachers*. Boston: Heinle & Heinle.
- Holliday, A. & Cooke, T. (1983). An ecological approach to ESP. In A. Waters (ed.), *Issues in ESP* (pp. 123-143). Oxford: Pergamon Press.
- Hutchinson, T. & Waters, A. (1987). *English for specific purposes: A learning-centred approach*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 市川伸一. (2001). 『学ぶ意欲の学習心理学』 PHP 研究所.
- 稲木哲郎. (1984). 「大学における教師と学生のコミュニケーション」 辻村明・水原泰介. 『コミュニケーションの社会心理学』 (pp. 79-93). 東京大学出版会.

- 石崎一記. (1995). 「教室内の内発的動機づけと外発的動機づけ」新井邦二郎. 『教室の動機づけの理論と実践』 (pp. 40-56). 金子書房.
- Jasso-Aguilar, R. (1999). Sources, methods and triangulation in needs analysis: A critical perspective in case study of Waikiki hotel maids. *English for Specific Purposes*, 18, 27-46.
- Lawson, K. H. (1975). *Philosophical concepts and values in adult education*, 2<sup>nd</sup> ed. London: National Institute of Adult Education.
- 深山晶子. (編) (2000). 『ESP の理論と実践—これで日本の英語教育が変わる』三修社.
- Munby, J. (1978). *Communicative syllabus design: A sociolinguistic model for defining the content of purpose-specific language programmes*. New York: Cambridge University Press.
- 小口孝司. (1990). 「自己開示」大坊郁夫・安藤清志・池田謙一. (編) 『社会心理学パースペクティブ1—個人から他者へ—』 (pp. 163-172). 誠信書房.
- 岡崎光子. (編) (1995). 『栄養指導論』南江堂.
- Porcher, L. (1983). Migrant workers learning French in France: A practical experiment. In R. Richterich (ed.), *Case studies in identifying language needs* (pp. 14-23). Oxford: Pergamon Press.
- Richterich, R. & Chancerel, J. -L. (1977). *Identifying the needs of adults learning a foreign language*. Oxford: Pergamon.
- 桜井茂男. (1997). 『学習意欲の心理学—自ら学ぶ子どもを育てる』誠信書房.
- Swann, W. B. & Pittman, T. S. (1977). Initiating play activity of children: The moderating influence of verbal cues on intrinsic motivation. *Child Development*, 48, 1128-1132.
- 辰野千寿. (1989). 『やさしい心理学—教室の心理学—』教育出版.
- Trimby, M. J. (1979). Needs assessment models: A comparison. *Educational Technology*, 19 (12), 24-28.
- 辻新六・有馬昌宏. (1987). 『アンケート調査の方法—実践ノウハウとパソコン支援—』朝倉書店.
- West, R. (1994). Needs analysis in language teaching. *Language Teaching*, 27 (1), 1-19.
- Zuckerman, M., Porac, J., Lathin, D., Smith, R. & Deci, E. L. (1978). On the importance of self-determination for intrinsically-motivated behavior. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 4, 443-446.

#### 参照サイト

文部科学省ホームページ ([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/04052801/002.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/002.htm)), (参照2006-03-07).